北陸支部
Web
広報誌

[Ah!] No.37

Contents

北陸支部大会報告
○支部長挨拶　西村 伸也（新潟大学）
○シンポジウム「地域活動における近隣大学の役割―中越沖地震からの復興の中で―」報告
田口太郎（新潟工科大学）
○若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって
高石 唯美／小塚 直人／吉澤 梓／鈴木 健之／峯田 雅人／中村 健太

支所だより　（テーマ：「水」）
○長野　ヒトを動かす水　柳瀬 亮太（信州大学）
○福井　農山村地域 -「水源の里」- の未来を考える　藤原 英一（サンワコン）
○石川　蓋の話　円井 基史（金沢工業大学）
○富山　富山県に現存する最古の寺子屋「混放洞」の改修（1）　坂井 修一（㈱坂井建築事務所）

シリーズ
○いきいき街づくり（長野）　物語を重ねてゆくこと
宮本 圭（シーンデザイン一級建築士事務所、有限責任事業組合ポンクラ）
○隠れた建築（富山）　富山県に現存する最古の寺子屋「混放洞」の改修（2）
坂井 修一（㈱坂井建築事務所）
○学生（福井）　女性がまちの細部をつくる　高橋 梢（福井工業大学）
○学生（石川）　優しい色合いに建築への思いを描く　山越 あゆみ（金沢工業大学）
○学生（新潟）　空間をつくること　錦　舞子（新潟大学）

2010年度 日本建築学会大会（北陸）報告　その1　（その2は次号にて掲載いたします）
○2010年度日本建築学会大会（北陸）報告　丸谷 芳正（富山大学）
○記念講演会（市民をつなぐ）報告　下川 雄一（金沢工業大学）
○トークラリー（夢をつなぐ）　報告　永野 紳一郎（金沢工業大学）
○見学会（歴史をつなぐ）　報告　松政 貞治（富山大学）
○夜なべ談義（伝統をつなぐ）　報告　加藤 則子（造形作家）
○職藝学院見学など（伝統をつなぐ）　報告　池嵜 助成（職藝学院）
○建築紛争フォーラム（建築と法曹界と市民をつなぐ）　報告　北岡 正弘（職藝学院）
○討議の集い　報告　永野　紳一郎（金沢工業大学）・富樫 豊（富山建築・デザイン専門学校）

お知らせ

○ **賛助会員**を募集しております。詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(社)日本建築学会　北陸支部
〒920-0863　石川県金沢市玉川町15番1号　パークサイドビル3F
Tel: 076-220-5566 / Fax: 076-220-3344 / E-mail:aij-h@p2222.nsk.ne.jp

（平成２２年１２月３日（金）発行）

ご挨拶
－多くの会員が学会の活動に繋がる仕組みをめざす－

西村　伸也
（新潟大学工学部建設学科教授・副学長、日本建築学会北陸支部長）

西村支部長

今年の６月に日本建築学会北陸支部の支部長に選出されました西村伸也です。まず、今夏富山大学で行われた日本建築学会大会では富山支所を中心とする会員の方々のご努力が実り、発表題数6,788題・登録参加者が9,680人（これを「クローハレ（苦労晴れ）」と読んでいます）で過去最大の大会になりました。ご努力いただいた支部会員の方々にお礼を申し上げるとともに、一緒にこの成功を喜びたいと思います。

さて、本紙面で支部長就任のご挨拶をさせていただけることになり、私のこれまでの研究・活動の紹介と支部長としてこうあったらいいなと考えている目標をご紹介いたします。すでに、目標は題辞に書いたとおりでこれ以上のことはありませんが、まずは、自己紹介から。

自己紹介：

新潟大学の工学部建設学科に所属して、建築計画・意匠の教授をしています。学校計画・まちづくりを中心に研究教育をしながら、出来るだけ建築・環境を創造する場に身を置くことを目指しています。新潟の学校や住居を調査したり、中国東北部とフランス南部の集落を歩いています。研究の対象は学校空間の生徒の行動であったり、町家の空間や集落のかたちまで様々で、この中で建築空間がもっている今は見えなくなっている仕組みを読み解いていこうとしています。

この研究の線上に実践としての設計を獲得しようとしてますので、うまくいったりいかなかったりです。計画から設計までの係わり方には深浅がありますが、計画をした聖籠町立聖籠中学校・私立北越高等学校、設計・デザインを行った新潟大学科学技術悠久会館、あゆみ保育園等のプロジェクト実践を経験しながら、毎年少しずつですが新潟に建築を実現しています。さらに、地域と大学が協働するまちづくり活動は、長岡市表町で歯抜けになった雁木を手づくりする活動が１４年、三条市で里山の緑を移植するポケットパークづくりが４年を経過しようとしています。ここでは、これまで自ら行っていた計画提案にとどまるまちづくりや期限のある環境形成としてのインスタレーションから離脱して、地域の人たちと学生とが自らの手で環境をつくっていく持続的で実践的なまちづくりを行っています。

目標：

これまでの支部活動についての俯瞰的な認識をしっかり持ってはおりませんが、支部・支所活動を出来るだけ多くの会員に開いていくことを目指したいと直感的に思い至っています。ますます会員数が減少することが予測され、学会の法人化移行・建築会館の維持の問題が顕在化する中にあって、支部として福井・石川・富山・長野・新潟を繋ぐ本支部の活動が、各会員の、特に建築に向かう若い人たちの活動実現と深く結び合うことが私の支部長としての目標です。

北陸支部では地域への貢献活動・会員相互の活発な活動が多くの方々のご努力で推進されています。これらを基盤として、さらに多くの会員の方たちが建築学会活動にいろいろなかたちで係わっていただけるようになる環境を実現することが、まず私のやることだと考えています。そのためには、建築学会に係わる情報伝達を開いたものとすること・学会活動へのオープンな参加機会の場を構築すること・支部運営に係わる意志決定は開かれた場で行われ、その意志決定内容を多くの会員が共有できること等を、皆様とご相談しながら、ひとつづつ進めていきたいと考えています。会員皆様から自由にご意見をお出しいただき、北陸支部の運営にご参加いただきますようお願いいたします。

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah137号

シンポジウム「地域活動における近隣大学の役割―中越沖地震からの復興の中で―」報告

田口　太郎
（新潟工科大学 工学部建築学科 准教授）

去る2010年7月17日,18日の両日に新潟工科大学を会場に日本建築学会北陸支部大会が開催された。本シンポジウムはその第一日目、オープニングの行事として執り行われた。奇しくも7月17日は、2007年7月16日に本学が立地する柏崎沖を震源として発生した中越大震災からちょうど3年と1日目にあたる。

本シンポジウムのテーマは「地域活動における近隣大学の役割」と題した。近年、大学の役割は教育・研究に加え、社会貢献が強く言われるようになった。その社会貢献の中でも、地域に隣接する大学がどのような役割を地域に果たしうるのか、を議論しようというものである。シンポジウム会場となった大講義室は学生や本会会員で満席となり非常に熱気を帯びた会となった。

シンポジウムではまず、来賓としてご参加頂いた佐藤滋本会会長により「市民事業と連携し支援する専門家、大学そして教育」と題した基調講演を頂いた。基調講演では、佐藤会長自身が関わるさまざまな都市計画事業への大学としての関わりを紹介頂きながら、地域の専門家や大学の役割、さらにはこうした社会貢献活動の教育的意味について論じて頂いた。

つづくパネルディスカッションでは、中越沖地震から3年、ということもあり中越地震からの復興活動を進める地元商店街からえんま通り復興協議会会長中村康夫氏、復興を支援する地元専門家として新潟建築士会柏崎支部から木村永氏、地元自治体として柏崎市総合企画部まちづくり推進室本間良孝室長、さらに地域活動を積極的に進めている大学関係者として長岡技術科学大学機械系上村靖司准教授に登壇いただき、それぞれの立場から近隣大学の役割についてお話し頂いた。

「地域」と言った際に、一番最初に浮かぶのが地域社会であり市民である。その市民代表である商店街からは中越沖地震からの復興プロセスの中で近隣大学である新潟工科大学や長岡造形大学の教員・学生による積極的な支援が、技術的側面のみならず元気づくりの点においても大いに頼もしく、勇気づけられるものであったとの報告があった。実際に、柏崎の商店街では復興イベントへの学生支援や復興計画策定に向けたワークショップでの専門家支援などさまざまな形での地域と近隣大学の協働があり、これがいわゆる「学術」的な面のみならず、元気づくりの上でも有効であった、ととらえられるだろう。一方で、地域の専門家としての新潟県建築士会柏崎支部からは同じように復興支援の現場での大学との連携によるデザインガイドラインに則したモデル設計などの事例をベースにお話しいただき、今まで小さな活動であった専門家と大学の連携がより具体的に動き出した成果としてのモデル設計の位置づけが報告された。さらに、これが建築士会の全国大会で表彰されるなど、全国的にも先進的な事例として位置づけられたことが示された。地元行政としての柏崎市からは、大学と市との提携があるなかでも、組織としての大学と地域との連携は未だ成熟しておらず、大学といえども個別研究室との個別事業における連携に留まっているとの課題提起もなされた。各地で大学と地域との提携が進む中、組織としての大学とどのような具体的取り組みが行われるかが、今後の課題であると言える。最後にご報告頂いた大学としての地域活動についてはその教育的意義について報告頂いた。上村先生のご活動はボランティアサークルの立ち上げから、学生による過疎集落への支援などであったが、集落への支援を通じて集落から喜びや感謝の声がある一方で、学生の社会教育としての意義も強く示された。

以上のように、単純に"大学と地域との連携"といっても、その役割は学生ボランティアから大学教員による専門的支援にいたるまで多岐にわたり、それぞれ大きな意義があると言える。特筆すれば学生への教育効果は特に大きく、大学教育でカバーできない社会教育部分について特に意義があることが示された。一方で、各地で進む大学組織と地域の提携については具体的な活動イメージが描けていない現実があり、研究者個人個人が独立的に在籍し、組

写真１　基調講演中の佐藤会長

写真２　ディスカッション風景１

写真３　ディスカッション風景２

織としての活動が難しい大学の状況も垣間見られた。

今回のシンポジウムは、成果や課題が実際に関わりのある方から生の声で語られたことは非常にリアリティに富んでおり、示唆的なシンポジウムとなった。

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah137号

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：

「木質系住宅の耐力壁および床の耐震性能に関する事例検討研究」

岡石　唯美
（新潟工科大学大学院自然・社会環境システム工学専攻1年）

在来木造住宅の壁や床についての耐震性能は、大工職人の経験と知識を踏まえ建築基準法や品確法などが定められていますが構造計算による検証はより精緻とされています。しかし4号物件であれば構造計算は不要とされています。そこで4号物件に対して構造計算を行い検証しました。また構造計算は正確であるとされていていますが日本住宅・木材技術センターが編集した計算の一部に略算的な検証があることからこの可否も検討しました。その結果、床と壁の検定の値に影響することがわかりました。

プレゼンテーションをする際に注意したことはどう伝えやすくするかです。数式や専門用語を正しく伝えるため、発表の仕方を工夫するとともに教授や先輩に練習を見ていただき訂正や表現の仕方の指導をしていただきました。また声についても注意しました。声を大きく、はっきりとすることでプレゼンテーションを印象強く、聞きやすくできたのではないかと思います。今回このような賞をいただくことができ今までの努力が認められ大変嬉しく思うと同時にこれからの研究もさらに精進していきたいと思います。

図1　重心Wと剛心のズレによりねじれが生じる

表1　ねじれ補正係数Ceを設定した計算条件

図2　方向ごとの充足率（計算条件1）

図3　方向ごとの充足率（計算条件2）

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah137号

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：

「アルミニウム耐震補強枠の解析による性能検証と構造検討」

小軍　匡人
（信州大学大学院工学系研究科社会開発工学専攻修士課程２年　五十田研究室）

今回、若手プレゼンテーション賞を受賞した研究は、アルミニウム耐震補強枠の解析による性能検証と構造検討である。アルミニウム耐震補強枠(以下、アルミ補強枠)とは、既存の木造建物に外部から容易に取り付けができ、開口部をふさぐことなく、耐震性能を向上させる事を意図して開発されたものである。

本研究では、まずアルミ補強枠の実大実験、接合部実験から、せん断性能を把握した。次に、アルミ補強枠を施工する際、既存建物の間口や高さに合う大きさのアルミ補強枠が必要となるため、実験から得られた各接合部の性能値を用いて解析をして、様々な間口や高さのアルミ補強枠の最大耐力や壁強さ倍率を算出した。そして最後に、建物が受ける地震力を健全にアルミ補強枠に伝達できるように各部構造の検討をした。

今回の受賞にあたっては、これまでの大学生活において、研究成果をこのような名誉ある賞として評価していただける機会がなかったので、本当に嬉しいという気持ちである。今回受賞できたことを自信にして、今後の研究もより一層力を注ぎたいと思う。

発表に関しては、ほとんどの人が知らない内容について、限られた時間でわかりやすく説明しなければならないので、発表用のパワーポイントを作成する段階で、自分の研究内容を詳しく知らない友人に何度も見てもらい、分かりづらいところを指摘してもらい、訂正するという作業を何度も繰り返し、初めて聴く人でも大まかな内容を理解してもらえるように工夫した。発表練習では実際にプロジェクターに映して、声を出すことで、発表時間の感覚や度胸が身に付いたので、頭の中で読む練習だけでなく、実際に声を出して練習することはとても大事だと感じた。

自分の考えていることを人に伝えることはとても難しいことであるが、目を見て話したり、抑揚をつけて話したりするなど、少しの工夫で伝わり方は大きく違う。今後、社会に出ても、プレゼンテーションをする機会はたくさんあると思うので、今回受賞できたことを自信にして活かしていきたいと思う。

図1　アルミ補強枠図

写真1　実大フレーム試験全景

写真2　柱はり接合部試験全景

写真3　柱脚接合部試験全景

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：「捨型枠付版状立体溶接鉄筋を用いたRC床スラブの構造性能に関する研究」

吉澤　梓
（新潟工科大学工学部建築学科4年）

この度はこのような名誉な賞に選出して頂き、光栄に感じています。私は今回、「捨型枠付版状立体溶接鉄筋を用いたRC床スラブの構造性能に関する研究」という題目で、近年の高層建築などの施工において利用されてきているFD床版について発表させて頂きました。FD床版とは、一般的に用いられている在来床版にトラス筋を配筋し、下部に鋼板を溶接したもので、現場で敷きこむことによって型枠・鉄筋工事が同時にでき、作業や管理の簡略化が図れる床版です。

このFD床版は、下部の鋼板が捨型枠とされているため、鋼板などの各部材の耐力が構造性能に算入されていないのが現状です。そこで、FD床版の各要因を変化させて部材実験を行った結果、FD床版は各要因が有効に働き、在来床版よりも構造性能的に優れているという結論を得ました。

建築学会での学生の発表では大学院生がほとんどですが、私は今回、学部４年次で発表に臨みました。パワーポイントは、一番にわかりやすさを考え、出来るだけ文字を減らし、効果的なアニメーションを加えて作成し、当日は、不安でいっぱいでしたが、何度も発表練習を重ねたことや先生・先輩からのアドバイスを思い出しながら、精一杯力を出し切れたと思います。今回の受賞を励みに、今後の研究に精進していきたいと思います。

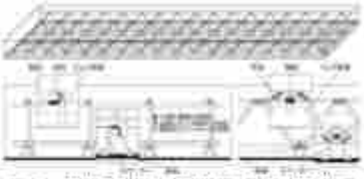

図1　FD床版の構成及び溶接状況

図2　現場での敷き込みの様子

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：「排水性舗装の状態による吸音特性の変化について」

鈴木　健之
（新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻修士2年）

発表のテーマは、最近一般国道などで普及している、排水効果や吸音効果を有する排水性舗装の吸音特性の変化についてです。この舗装は、長期間使用すると舗装内の空隙がふさがり、効果が薄れてしまいます。効果を持続させるためには空隙の清掃や舗装の打換えが必要であり、それらを行う時期の検討や清掃後の効果の回復の評価を行うために、舗装の空隙の状態の健全度の診断が必要となります。一方、これまでの研究で、健全な状態の排水性舗装の吸音特性を測定した場合、特定の周波数で吸音のピークが確認されることが分かっています（図1）。今回は、本研究室で取り組んでいる音響特性から排水性舗装の健全度を計測する方法を確立させるためのデータ収集として、実際の舗装の経年変化や規格の違いによる舗装の音響特性の変化を、人工的に目潰れ、目詰まり状態にした試験体や、規格を変えた試験体を使った実験で観測しました（図2,3）。

発表では、膨大な試験体の吸音特性のデータをどの様に見せるべきか非常に頭を悩ませました。今回はアニメーションを使い、なるべく見やすくて分かりやすい図になるよう心がけましたが、頂いたプレゼンテーション賞を励みに、これからも工夫を重ねていきたいと思います。

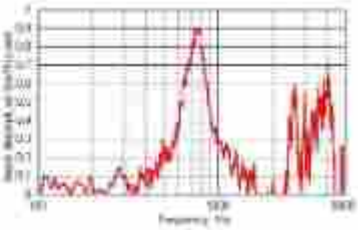

図1　排水性舗装の吸音特性

図2　健全な状態の排水性舗装試験体

図3　空隙を詰まらせた
排水性舗装試験体

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：

「発電所建屋を対象とした夏季と冬季の温熱環境改善に関する研究」

峯田　雅人
（新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻博士前期課程 藤林研究室）

今回若手プレゼンテーション賞を頂いた発表論文は、「発電所建屋を対象とした夏季と冬季の温熱環境改善に関する研究」です。

火力発電所タービン建屋では、電子機器の周囲環境や労働環境の悪化を避けるため、タービン本体や熱交換器等から発生する高温の排熱の処理が課題となります。そこで、本研究では実測調査から建屋内の温熱環境を把握し、熱・換気回路網計算により温熱環境の改善を検討しました。そして、「冬季において開口条件を変化させることで、作業域を18℃～22℃の快適な温熱環境に保つことができる。また、夏季において建屋内の室温は50℃前後まで上昇するが、搬入口シャッター開放に伴う通風により平均11℃、最大で15℃の温度低下が得られ、大幅な労働環境の改善が可能である」という結論を得ました。

発表時には「写真や表、図に適宜アニメーションを加え、文字は簡潔かつ分かりやすく、はっきり大きな声でプレゼンを行う」という基本的なことを最も心がけました。加えて、発表練習において改善点の指摘を受けたことで、完成度が格段に上がったように思います。

この度はこのような名誉ある賞を頂き、大変嬉しく思っております。この経験を生かして、今後の研究に励んでいきたいと思います。

図1　解析対象の概要

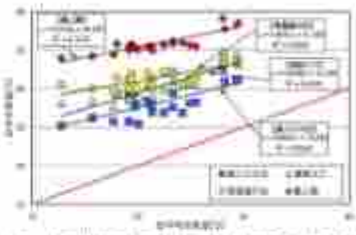

図2　各測定点の日平均外気温と日平均室温の関係（夏季）

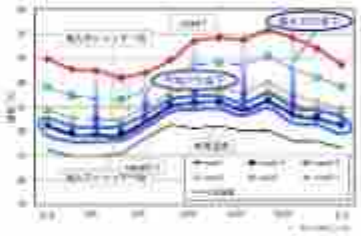

図3　外気温と室温の関係

北陸支部大会研究発表　若手優秀プレゼンテーション賞の受賞にあたって

発表題目：**「雪処理方法の変化とそれに対応した雁木町家の利用 －上越市高田の事例検討－」**

中村　健太
（新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻2年）

今回の研究発表では、豪雪地である上越市高田において、道路（写真1）の雪処理方法の変化に着目し、それぞれの雪処理方法に対応した雁木町家の利用を把握することを目的としました。昭和30年代まで、屋根から道路へ下ろした雪は人力により処理されていました。昭和30年代後半から機械除雪へと移行すると、屋根の一斉雪下ろしが行われるようになり、それに合わせた町家の建て方がみられるようになりました。一方、雪処理方法が変遷する中でも、雁木の雪囲い（写真2、図1）など、雁木通りに配慮した各住戸による雪処理が現在でも変わらずに行われています。

発表の際に心がけたことは、調査や分析を通して「分かったこと」をはっきりと述べることでした。分からないことは分からないと割り切り、自信を持って発表を行いました。それが良い結果につながったのだと思います。

若手プレゼンテーション賞に選出していただいたことにつきましては、誠に光栄に感じております。この場を借りて、指導をしてくださった先生、また調査や発表練習に付き合ってくれた研究室の皆さんに感謝致します。この賞を励みに、今後もさらに研究を進めたいと思います。

写真1　積雪時の道路【平成22年(2010)】

写真2　雁木の雪囲い

図1　積雪時の雁木通り断面図

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
支所だより　～長野～　テーマ：「水」

ヒトを動かす水

柳瀬　亮太
（信州大学工学部建築学科講師）

前号の『土』と同様、『水』も隠される傾向が近代社会の発展とともに見られます。長野市内においても用水路や河川が暗渠化されている事例は少なからず見られ、その傾向は都市部であるほど顕著です。それでも、『水』は視覚・聴覚を通じて感じられる場面が日常に数多く残っているため「意識され易い存在」と言え、人間にとって、視野の中に『水』が存在することは、その光景の魅力を向上させるように作用すると考えられます。このことは、ウォーターフロントの開発や水を主題とする景観および住環境研究の事例の多種多様さ、親水空間の増加などに現れています。

しかしながら、水の存在が必ずしもプラスに作用するとは限りません。水が汚れていたり、水辺にゴミが散乱していたり、不自然と感じさせるような整備がされているような場合は魅力を低下させるだけでなく、近寄りがたい場と認識されたり、不法投棄など非社会的行動を誘発する場と化すことになります。道端の単なる水たまりは回避行動を促しますが、魚などが泳いでいたり、小鳥が立ち寄るよう整備された小池は人をひきつけます。また、単純に整備されたのではなく、自然さを意識して形作られた場に、人は魅力を感じることが多いです。

本年度、研究室では『水の持つチカラ』を考えるキッカケとして、松本市で開催されている『工芸の五月』における『みずみずしい日常』という企画（人場研主催）に関わりました。これは、松本の湧水と工芸・クラフトを結びつけることで、豊かな水のあり方、工芸・クラフトのあり方を提案するとともに、松本市民や観光客に湧水や工芸を身近に感じてもらうものでした。

企画では、「守るべき水」と「気づかせる水」をテーマとして、湧水を意識させる散歩コースを提案しました。前者は、源池の井戸など、歴史ある湧水を巡るとともに、その歴史などについて紹介する資料を提供することで湧水の大切さを再認識してもらいました。後者は、普段は側溝などに流してしまっていて、近くを歩く人も気づくことが少ない湧水に水口などを設置し、水が落ちる音などで意識させるように工夫しました。

実際に自分自身、湧水マップを片手に散歩する企画に参加し、世代を問わず気軽に接することができ、四季折々、五感（温冷覚を触覚と区分すると６つの感覚）を通じて楽しめる『水のチカラ』を改めて感じさせられました。ヒトを動かすことをふまえ、水を隠すのではなく、顕在化させる取組みを進め、『ヒトを動かす』仕掛けとして活用する姿勢が求められるように思います。

図1　水路の痕跡を感じられる空間

図2　暗渠と明渠の境界

図3　親水空間

支所だより　～福井～　テーマ：「水」

農山村地域 -「水源の里」- の未来を考える

藤原　英一
（株式会社サンワコン　地域計画部）

仕事柄，福井県内や滋賀県，京都市などにおいて都市計画や市街地開発事業に携わっていますが，ここ近年，滋賀県内の農山村地域において，まちづくりや地域づくりに関わる機会を頂いています。昨年度，栗東市では，市内から琵琶湖を眺望できる14戸の山あいの集落を活動拠点として，地元のまちづくりリーダーや任意のまちづくり団体などと連携して間伐材や古民家，水仙などの地域資源を活かした都市住民との交流事業を開催しました。長浜市余呉町においても，「田舎暮らしを楽しむ」をテーマとして都市住民と農山村地域の交流事業を企画・運営し，集落を歩き，地域の文化を体験し，地域の方々と会話をする機会を持たせて頂きました。

人口減少や高齢化が著しい農山村地域と都市住民の交流は，地域の活力を育む貴重な機会となりますが，地元住民の地域に対する誇りと愛着，自分たちのできることから実践する主体的な意識，そして都市住民の積極的な関わりがないとなかなか実現できないものです。近年，全国各地の農山村地域において地域固有の資源を活かした積極的なまちづくり活動が見られるようになってきていますが，今後は都市住民の関わりが広く，そして持続的に行われるよう，全国レベルで都市地域と「水源の里」の交流を大きなムーブメントとして育てていくことが重要であり，そうした活動が農山村地域の豊かな暮らしに繋がっていくものと感じています。

先日，大学の研究室のある集まりで，越前市の府中馬借街道を歩く機会を企画しました。別名，西街道と呼ばれる馬借街道は，北国街道の西側において比較的緩やかな山地を抜けて日本海に至りますが，特に，標高260mから日本海に向かう下り道は，大部分で道に並行して綺麗な水がやさしく流れており，心身ともにリラックスできる貴重な空間となっています。地元住民による草刈りをはじめとする維持管理や手作りの看板の設置など，「水源の里」の資源をしっかりと次代に繋いでいこうとする想いが随所に確認できる貴重な場所でもあります。私が暮らす南越前町宅良地区にも明治30年代に築かれた砂防堰堤群（アカタン砂防）があり，「田倉川と暮らしの会」という任意のまちづくり団体が環境づくりに取り組んでいます。こうした多くの活動が，いろいろなところで，様々な形でネットワークされ，「水源の里」を守り・育む大きな潮流となることを目指し，微力ではありますができるところから活動支援に携わっていきたいと考えています。

量から質へ，物の充足から心の充足へと人々の価値観が変化し始めている今，私たちは，一人ひとりが暮らしの豊かさを考え直してみる時期に来ているのではないかと思います。豊かな自然環境をはじめ，地域に残る歴史・文化資産，住宅や生活文化など，様々な視点から自分が暮らす身近な地域を見つめ直し，地域への誇りと愛着を高め，多くの人と交流しながらその価値を共有していく。そうした取組が全国各地で活発になれば，おのずと豊かな暮らしが次代に繋がり，ゆっくりと「水源の里」が再生されていくのではないでしょうか。

図1　観音寺集落の眺望景観

図2　間伐材ベンチの製作ワークショップ

図3　古民家見学ツアー

図4　馬借街道とせせらぎ

図5　砂防堰堤群（アカタン砂防）

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
支所だより　～石川～　テーマ：「水」

苔の話

円井　基史
（金沢工業大学環境・建築学部建築都市デザイン学科講師）

夏の朝7時、登山レースはスタートを切り、70名ほどの選手達とともに舗装道を駆け上がる。そこは菩提林（ぼだいりん）と呼ばれる老杉におおわれた参道であり、その先の石段を登ると、一面に絨毯のような苔が広がる平泉寺白山神社の境内であった（図1）。水蒸気の立ち込める杉林に朝日が差し込み、木立の合間からこぼれる幾重もの光の筋が苔の海に降り注ぐ。「苔寺（こけでら）」といえばまず京都の西芳寺が挙げられるが、ここ福井県勝山の平泉寺も苔寺として有名である。前々から訪れたいとチャンスを伺っていたが、白山禅定道を標高差1200mほど登るこのレースへの参加を機に、平泉寺の苔を見学することができた。

北陸は低温多湿の気候条件により、日本で最も苔の生育に適した場所のひとつに挙げられる。昨年、市道拡張に伴い閉園となってしまったが、石川県小松の「苔の園」は、苔の愛好家の間では有名な場所であった。日本三名園に挙げられる兼六園も、雨上がりに訪れれば、苔がとても綺麗なことをご存知だろうか。北陸は年間を通して降水量が多く、湿度も高い。上記の苔たちは、白山山系の豊富な雪解け水の恩恵を受けている。

苔は和歌に多く登場し、古来より我々日本人の身近にあった。国歌にも登場する。苔は長い年月や古びた様子を表現したり、あるいは死を隠喩することもあった。英語では「A rolling stone gathers no moss（転がる石に苔はつかない）」ということわざがある。「落ち着かず動き回る人には能力が身に付かない」「活動的に動き回る人の能力は結付かない」と、苔は良い意味にも悪い意味にも使われている。西芳寺は苔寺で有名だが、作庭当初は苔がなかった。南極やヒマラヤに生息する苔、銅を好む苔もある。苔の話は奥深い。

現代都市における苔は「滑る」「汚い」とあまり良い評判は聞かない。東京などの大都市では、屋上緑化の義務化に伴い、軽量でメンテナンス不要の苔緑化が着目されつつある。庭園や神社仏閣で苔に癒される人もいる。筆者のように、建築環境工学の視点から苔に着目している変わり者もいる（図2～5）。普段苔を気にする人は少ないだろうが、健気に生きている足元の苔に注目すると、普段の見慣れた景色も変ってくること請け合いである。

話は戻って冒頭の登山レースは、トップに30秒ほど及ばず2位であった。世界的に有名な登山レースに、東南アジア最高峰のキナバル山（4095m、マレーシア）を登って下るレースがある。このキナバル山、実は苔でも有名である。こちらの登山レースにも、苔の見学を兼ねて一度参加したいものである。

図1　苔の絨毯が広がる平泉寺白山神社
（福井県勝山）

図2　苔に期待される環境調整効果

図3　苔による壁面緑化の事例
（石川県野々市）

図4　実験試験体の近景
（コンクリートに自生した苔の温度と蒸発量を計測）

図5　研究室の学生達と「コケツアー」へ

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
支所だより　～富山～

富山県に現存する最古の寺子屋「混放洞」の改修（1）
教育の情念が蘇える

坂井　修一（㈱坂井建築事務所 主宰）

はじめに

富山の古代から近世までの文化圏が庄川と神通川にはさまれた領域であることに着目して、当該地域の社寺建築を中心として調査していたところ、標記建造物(混放洞)が私を引き寄せ、命の吹き込みをメッセージにして託してきた。そんな出会いがあった。そこで私は、混放洞がもつ教育の情念を蘇えらせるばかりではなく、建築と環境と風土とのかかわりの重要性を考えた。まずは、混放洞に新たな命を吹き込む改修について話をする。

1．概要

所在地：高岡市下山田／建物名称：混放洞／用途：寺子屋(私塾)／建物種別：土蔵

建設年代は1856年以前、幕末期であり、今から150年ほど前である。昭和28年(1953)、石置き屋根を瓦屋根に葺き替えた。一級河川和田川の河岸段丘に位置するところに立地。近くには増山城跡があり、風光明媚なところである。段丘斜面層に、間口3間、奥行き5間の土蔵がある。これを、幕末期から明治初期まで、私塾として使っていたという。

（図1）位置図、庄川水利用パンフレットより引用、一部加筆
（写真1）和田川上流方向

2．寺子屋概要

2-1．教育内容

どのような教育がなされていたのか。寺子屋といえば、読み書きそろばんが定評であるが、本寺子屋は人材育成のための私塾であった。文献調査による裏づけはようやく始まったところであるが、その事実を物語る具体的な教育資料が多数発見された。なかでも、貴重な医学書、易学の文献があった。どうやら道教による教育を行っていたと推察できる。承知のように老子による道教は、現世利益の不老長寿、神仙思想、陰陽五行を中心としたものである。 これに関して、 飛鳥寛栗氏から次のような指摘があった。「当時の越中は朱子学が支配しており、道教の影響は皆無といってもよい状況と考えたほうが適切である。」

2-2．願いをこめた教育、寺子屋(私塾)の名称が語る

なぜ当該寺子屋が混放洞と称されたのであろうか。当時の寺子屋の名称とはまったく格の違いを見るようである。仮説ではあるが、中国思想そのものからきていると思っている。すなわち、「混」とは混沌であり、「放」とは気を放つことであり、「洞」とは奥深いところを明察するところである。混放洞とは、「物ありて、天地に先立って生ず混沌盛大の奥深いところを明察するところである」といえる。また一方で、「混放洞とは身分の違いを超

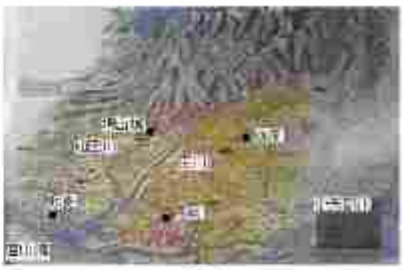
図1

写真1

写真2

写真3

写真4

えて人を集め、既成概念より人を解き放し自由にする奥まった場所」、と解釈している人もいる。いまだ、藪の中にある。

（写真2）混放洞の書

2-3．この地における教育実績

漢学者である河合平三氏は、幕末期に上記の思いをもって寺子屋を建造し、教育を行ったのであろう。ちなみに、医学書について、富山大学医学部の方にお見せしたところ、一級品との評価をいただいたが、なぜ片田舎のあの場所でこれらの資料があったのかが理解できないとも言っておられた。道教思想をバックボーンにあることを考えれば、上記の疑問はたちどころに消えてしまうものと思われるが．．．．．

3．建物の構造的および材料的特徴

建物は、当地において使いまわしの材料を使い、施工されていた。以下に述べる。・土蔵は、二階建てのごく普通の箱型のもので、間口3間、奥行き５間である。1856年(幕末)、この土蔵を増築し、これを塾として混放洞を開いた(古文書より)。増築部は「戸前」と呼ばれる下屋のようなもので、間口3軒、奥行き2軒となっている。屋根については、本来なら本体と付け部の境で屋根が段状となるところを、一枚の連続屋根となっている。こうした外観が、一般の土蔵には見られない風情をかもしだしている。

（写真3）北側面を写す。左側(東側)に下り斜面があり、その先に和田川がある

・土蔵は通常無窓である。土蔵を塾として使うために明り取り用に、窓は西面に１箇所、東に１箇所、南面に１箇所の計３箇所に設けられている。
・戸前の二階西側は、教師の部屋であり、床の間がある。床の間は神聖なところとして、今でも家の人は敬意を表している。二階の他の部屋および1階は弟子たちの部屋となっていた。教師の声がすべての部屋にいきわたるといったところである。
・置き屋根は当時、石置き木皮葺であったという。昭和の修理で瓦葺きとなった。土屋根は野地板の上には杉皮７mmのものを二枚重ねで載せ、しなやかさをかもし出している。また杉皮の上に(スライス状の)竹小舞をひき、その上に泥を塗っている。（写真4、5）
・使用された木材については、柱と土台では「あて」を、梁には「松」を使っている。材の大きさについては、土蔵本体では８寸材が使用されている。下屋部分では5寸材が多用しているが、一部6寸材も使っている。
・素材を自然のままに使用している。たとえば二階床の根太に松材が使用されているが、松材の左右にゆがんだような曲がりも何の違和感なく、かえって美しく力強くみえる。
・壁土は非常に決めの細かい良いものである。近所に良い土が出たとのこと。打撃を加えたくらいでは土は少しも落ちない。

4．建物の改修

4-1．改修骨子

持ち主がどうしても(とにかく改修して)残したいとの意向を汲んで、改修に当たった。その際、当該建物は文化財の指定を受けるに十分な価値を有していることに鑑み、文化財保存の姿勢でのぞむことにして、当地の風土と当該建物の関係性をそこなわないように、また建物の気品を継承することに努めた。改修の理念は、建物に新たな命を吹き込むことである。このため、ど

写真5

写真6

写真7

写真8

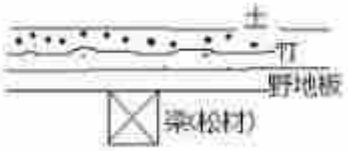

図2

写真9

のようなことをするのか悩んだ。具体的な骨子を次のようにした。
・第一には、建物そのものは、現況のまま改修することだから、壁は一切土を落とさず、荒壁とする。
・第二には、「対震」には上屋には一切手をつけず基礎部分で対応することにした。これは、現代技術を構造物本体に一切かかわらせないということである。
・第三には、改修後の使われ方にも踏み込み、持ち主に愛着のもてるものであるとともに、開かれたものとする。

4-2．曳き家

基礎をやり直す際に、上屋を移動させねばならなかった。曳き家では、二種類の方法がある。ひとつは、土台の上の土壁を2cmほど水平にカットして、この隙間に土台を拘束するように鋼材を入れて曳き作業をし易いようにする工法である。いまひとつは、そのようなカットをせずにカスガイ(かけがね)を利用する方法である。今回は後者の方法を採用し、ジャッキは1cmほどの不同差の範囲内で、壁土を破損することなく、曳き家を行った。(写真6)

4-3．基礎・土台について

・改修前の基礎は石基礎であり、大谷石に似た近辺（砺波）から産出された石が使用されていた。
・対震については、地盤免震を採用し、上屋の耐震補修は行わないものとした。
・文化財においても対震性能をあげるために免震装置をとりつけることが流行だが、そんな方法よりも地盤のほうに免震性能を具備すること（地盤免震）の方がはるかに効果的であり、かなりのローコストになる。詳細は追ってレポートしたい。ちなみに、住宅には今流行の免震装置をつける必要はまったくない。
・木材の腐食を防ぎ抗菌するために、銅版を土台と布基礎コンクリートの間にかますが、その銅版の厚さは通常0.4mmのところを、1mmにした。この位の厚さがあれは銅版そのものの耐久性・荷重・腐食にも対応できるものと考えている。（写真7、8）

4-4．上部構造物

・垂木-野地板の上に泥を載せているので、泥の湿気が垂木の上端から内部にむかって腐食を進行させており、シロアリに食われていた。打撃音ならびに目視では、腐食しているかどうかはわからなかったが、念のために木材をはずしてみて腐食を発見したしだいであった。なお、今回の調査では、含水量測定、超音波測定、応力波測定は行っていない。（図2）
・土台については、「あて」材が使用されているので、虫食いは表面のみで深部までまったく達していない。写真では、傷んだ土台材を断面方向にスライスにし、材の(鉛直下方)下側2/3域の腐食部を除去した。上側1/3域では、木質の緻密さがしっかりとみてとれる。富山県木材試験場の栗崎氏によると、シロアリによる食われ方には種々あるものの、このような食われ方はたいへんめずらしく、なぜそうなったかはわからないといっておられた。（写真9）
・桁と梁の仕口部では、ほぞによる接合となっている。腐った桁を新木にとりかえたために、梁との接合をし直すことになった。ほぞそのものが痛んでいる梁の接合には、力の流れ、量を推定し、計算で検討し、下図のようにほぞの両側にそれぞれ楔を挿入した。（図3）
・木造構造物で100年も経過すると、全体に対して30%ほどの木材は傷んでいるというが、本構造物では、取り替えた木材は全体に比して10%にもみたなかった。これは、当該建物が斜面崩に立地していることにより、風通しが

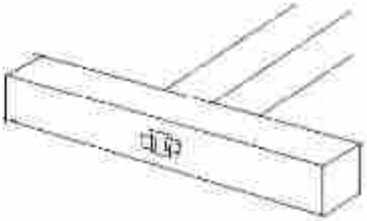

図3

写真10

写真11

写真12

良いため腐らなかったものと思われる。このくらい腐った木材が少ないのは大変めずらしいことである。
・戸前部の梁が破損していたところの壁の一部が曳き家の際に1～2cm程下にずってしまった。この部分については、竹小舞をやり直し、泥を塗りなおすことにしている。なお、壁土は福井県武生のものを下塗りに、当建物からのものを塗りなおした。（写真10、11）
・泥葺きの下屋根については、側壁頂部の壁塗りとともにやり直した。（写真12）
・壁については、漆喰仕上げや板張りなどあるが、荒壁は富山独自のもので、他の地域では見られない。ただ、防水性を向上させるために、一工夫を考えて、今はメーカーの方で実験を行っている。
・シロアリは、材を一度食したら、その後はその材には寄り付かないという習性がある。

4-5．施工に際して
・こちらの意図することをしっかりと伝え施工させるために、小さな現場だからこそ、毎日朝早くから現場を視ている。時として一日中現場にいたこともある。
・基礎工事では、建築の業者ではなく土木の方を使うことになった。
・コンクリートは羽根建設の提案によって高炉セメントを使った。耐久性に優れているからである。ただし、気温が摂氏35度を超える猛暑日が続くなかでの暑中コンクリートであったため、コンクリート管理には心を砕いた。
・曳き家作業では、壁土を一切落さないよう注意深く行った。

4-6．改修に携わって実感したこと
・自分がディレクターとして施工を行っている。 選定した施工業者は文建協の仕事をも多数こなしているので、非常に高い技術を持っている。
・改修は虫害や腐食との戦いといった様相にあるといってよい。木質の鑑定を木材試験場にお願いした。雨の部材への浸透、土からの水分の浸透を構造物の形状との兼ね合いで、鑑定結果を活用した。

以下、シリーズ「隠れた建築」（富山支所）に続く

（取材・編集：　富樫　豊、　丸谷　芳正）

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号

シリーズ「いきいき街づくり」～長野～

物語を重ねてゆくこと

宮本　圭
（シーンデザイン一級建築士事務所、有限責任事業組合ポンクラ）

文化財的な価値がなくても魅力ある建物

2009年の秋より、信州善光寺門前に位置する東町で、「KANEMATSU（カネマツ）」と名付けた建物を修復しながら事務所として使い、さらにKANEMATSUを拠点にさまざまな活動を行うプロジェクト「bonnecura project001 KANEMATSU」を実行しています。

東町は、長野市の商工業を支えた大きな問屋街でした。長野市の老舗の多くはこの東町を発祥の地としています。今も残る蔵や商家は、この地で紡がれてきた歴史や人の交流を物語る貴重な存在です。1910年にこの地に建てられた約150坪の床面積を持つ「KANEMATSU」もそのひとつです。

「KANEMATSU」は旧金松商事が1971年から2008年の末までビニール製品の卸売業、そして工場・倉庫として使用してきましたが、郊外にできた卸売団地への移転や他社との経営合併などから、その役目を終えることになりました。

3棟の蔵とそれらをつなぐ平屋からなる建物群は、文化財としての価値はありませんが、時を重ねた風合いが魅力の建物です。しかし、その後の利用については、建物の大きさ故に全面的な改修を行うには費用がかかり、借りる側としても設備投資の大きさから、建物の魅力は感じつつも手が出せない状況にありました。

このままでは何も生まれず、所有者の負担のみがかかることに加え、使われなくなった建物はすぐに傷んでいってしまいます。地域の発展とともに歴史を重ねてきた建物は魅力的ですが、建物の老朽化や維持管理の問題から、このような古い建物は消失する傾向にあるのが現状です。

何か有効活用できないものかと市内の不動産屋から相談を受け、一時は利活用していただけそうな人に紹介していたのですが、なかなかやってみようという人は見つかりませんでした。そのうちに"それなら自分たちでなんとかできないか？"と考えるようになり、このプロジェクトが始まりました。

有限責任事業組合ポンクラ

プロジェクトを進めているのは5社7名により構成される有限責任事業組合ポンクラです。　シナノカネマツ株式会社が所有するまちなかの古い工場を借り受け、自分たちの手で改修、再生しようと結成した異業種ユニットです。建築士、グラフィックデザイナー、編集者・ライターとして独自の活躍をしている７人が知恵と労働力を出し合いそれぞれの技術を生かし、建物をオフィスとしてシェア利用しながら、自ら建物に手を入れ、自らブランディング、プロモーション活動を行っています。建物の改修自体も一過性のイベントで終わらせず、未来へ続く活動にしようと、向こう30年間、活動を継続させることを前提に「LLP（有限責任事業組合）」を立ち上げました。資金がないので、頼りになるのは自分たちが個々の仕事で培ってきた経験や能力やネットワーク、それに労力だけ。それがいろいろな方面にアンテナを張ったり工夫したりすることにつながり、ハード、ソフト両面で良い結果を生み出しています。

図1　有限責任事業組合ポンクラ

図2　自ら施工している改修の様子

図3　「門前に寄り添うこと」と題したパネルディスカッションの様子

図4　蔵を改装したシェアオフィス

図5　２ヶ月毎に行われている門前市の様子

古い建物が持つまちと共有した時間を再評価する

これまでKANEMATSUでは、ポンクラが主催してさまざまなイベントを行ってきました。また、市街地において短期で場所を借りたい、または、古い建物が持つ雰囲気を大事にしたイベントスペースとして利用したいという団体・個人に、時間、空間を提供しています。　単発のイベントを、どうしたら継続した状態にあるモノとつなげながら考えていくことができるかは、まちづくりにとって大切な視点だと思います。ポンクラが歴史あるまちの新しい再生モデルとして試みていることは、古い建物が持つまちと共有した時間を、まちの魅力として再評価すること、そして人とまちをつなげながら、自ら古い建物で日々を営むことです。そうして建物が持つ物語に新しい物語を重ねていければ、"厚み"があるいきいきとした魅力的なまちが甦ると信じています。

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
シリーズ「隠れた建築」～富山～

富山県に現存する最古の寺子屋「混放洞」の改修（2）
水路が運んだ教育文化

坂井　修一
（㈱坂井建築事務所　主宰）

1～4（支所便り～富山～）はこちらからご覧ください

5．当地の教育環境・文化環境

5-1．地域文化

・庄川と神通川にはさまれた地域は、ほかの地域に比べて文化水準が大変高い。これは、文化が水路を通って平野奥深くまで伝播した結果である。水路は山麓手前まで確保できるので、例えば庄川をさかのぼって千光寺など大きな寺院があることからもわかるように、文化が水路でつながっているといえる。

・上記二河川にはさまれた領域に散在している大きな寺院は、いずれも交通の要所に位置し風光明媚なところに立地している。

・対比して県東部域を考察すると、いずれの河川も急流であるために、水路を介した文化の伝播はあるものの、海沿いの地区にのみ文化が定着したと考えられる。

（写真13）和田川河岸段丘、高岡市下山田地区。正面の山の連なりに沿って和田川。撮影地点背後に庄川が共に富山湾方向(N方向、左側)に流れている。

5-2．教育

富山県の塾および寺子屋については、前田英雄先生が研究されておられる。先生の研究によれば、富山における教育施設として、これまで大きな役割を演じた塾・寺子屋や藩校は次のとおりである。

(1)小西屋（鵜池居）。小西有義の私塾。明和3年(1767)～明治32年

(2)藩校「広徳館」。教官は岡田呉陽。1661～1672

(3)広沢塾（氷見市）。広沢周斉の私塾天保5年(1835)～明治7年

(4)聞名寺（八尾）。富山で最古の寺子屋。読み書きそろばん。寛永9年(1632)～明治期

(5)その他

混放洞は、人間を磨く教育により、(富山における)昔の著名人(県西部地区)を多く輩出した。また混放洞の塾長は、杉木教学所（明治2年から4年まで存続。十村が設立。砺波市）の教師と戸長を務めたという。なお、天神様をまつったものとしては、於保多神社(富山市)、水島神社（小矢部）天満宮（射水市）があることを付記しておく。

5-3．川により形成された広大な河岸段丘

混放洞のある地域は、和田川および庄川により形成された広大な河岸段丘にあり、はるか北に小杉・富山湾まで、西には小矢部まで見渡せるもので、富山において他にはないものである。このため南北朝時代・戦国の時代には、当該地域は軍事的要所として山城である増山城が位置し、城下町も形

写真13

写真14

図4

写真15

写真16

写真17

成されていた。混放洞はこのような風光明媚なところに立地しており、少年が大志を抱くには、もってこいの場所といえる。なお、今は、城跡が2009年国指定の史跡となっており、砺波市はここら一帯を観光地化したく、地域の整備に着手している。

写真18

5-4．河岸段丘一帯を活用した地域づくり

・（前章にあるように）当地は文化水準の高い地域であったことを裏付けるがごとく、混放洞で学び後に県初の国会議員となった島田氏の邸宅もある。これは、明治時代に建てられた洋館の香りのする木造住宅である。（写真14）

・地域の方20数人と、当地におけるこうした建造物の文化的価値をどう活用していくかを話し合った。文化的価値の高い建造物は遺産として残すことにやぶさかではないが、保存のための経費の面を考えると、頭がいたいといった声はもちろん出た。また、文化価値を自分の手で守り育てて生き、地域の宝にしていくべきである、といった頼もしい意見もあった。

・私は、青少年の教育の観点で、混放洞や島田邸、増山城を含めた和田川河岸段丘一帯を野外体験学習の場として、地域がづくられていくことを願っている。

6．最後に、建築家の役割

6-1．坂井氏の持論

建築のテリトリーは、世間では狭く、単に家を作るものといった印象でとらえられているが、最近の街づくりやランドスケープと呼ばれているものもすべて建築なのである。ただ、分業の高度化により、建築は建物のみといった狭い意味のものにおしこめられているが、実はそうではない。

6-2．坂井氏のスタンス

坂井氏は、常に基本からじっくりと問題に対処することを技術者の当然のこととして心がけておられ、実務社会では何事にも効率を優先するあまり、基本がないがしろにされていることを憂いておられるようにみえる。彼の話を聞くと、ひとつひつつが、確かにそのとおりといったことばかりであるが、残念ながら、彼の話を理解できる方は極めて少ない。いわんや、彼と同じように問題点を指摘できる方は、（編集者の見る限り）ほとんど皆無である。

6-3．文化財の修復の持論

文化財に申請してもおかしくない当該寺子屋はれっきとした文化財である。こうした文化財を後世に残すことになれば、改修をしなければならないが、実は現代技術をもってして改修は時には誤った工法を取ってだいなしにすることもままある。原因は改修の現場技術者は技術を知らないままに経験で対応するところにある。とくに、地震に対してどう対処するかについては、建築専門家でさえもよく分かっていない。実は、地盤と構造物を一体にして考えることのできる方がほとんどいないからである。（建物は地盤上にある。地盤は土木の範疇、建物は建築の範疇として、分業化が進みすぎている。）今、工学においては、こうした点に鑑みてするどく現状を批判するとともに、最先端の技術を下々の建造物にも適用すべく頑張ることが望まれている。特に、高価な免震装置を取り付けるのは木造の文化財には似合わないとして、地盤のほうに免震効果を期待する工夫が富山の地において試みられようとしている。これもおそらく日本発である。

6-4．伝統技術文化の継承と創生

大工仕事では、ノミがドリルに、カンナが自動カンナに、釘打ち・ネジ

打ちが電動打ちに、手仕事が道具使用さらに機械使用に、使用道具が変わってきている。当該建物に使われていた釘とボルトこうした状況のなかで「ものづくり」すなわち木造建築が直面しているのである。一般の建造物では、そうした時代の流れを反映した施工が行われていくようである。これも、技術の継承のあり方である。よく、伝統工法を守ることが継承といっているが、そうではなく、継承とは時代とともに形を変えていくものも含まれるものであり、創生といってもいいのである。（図4）（写真15、16）

6-5．協力者 これまで協力をいただいている方々は次のとおりである。
[調査・資料分野]飛鳥竟栗（前 善興寺住職）、前田英雄（富山県郷土史研究会会長）
[記録分野]富樫豊
[木材分野]栗崎宏、長谷川益男(富山県木材試験場）、栗瀬佳之、森哲郎（京都大学）、田中圭（大分大学）
[振動分野]池本敏和、村田晶（金沢大学）
[施工分野]曳き家および工事総括：羽根建設、基礎工事：谷口建設、板金工事：井上板金工業、木工工事：中川建築、左官工事：中村左官工業所

このような物件に出会わさせていただきました河合さまに感謝申し上げます。
（写真17）清払いと安全祈願祭
（写真18）完成した基礎の上に上屋を戻す

おわりに～（編集者から）
こうして混放洞に新たな命を吹き込むことにより、人と建築と環境との新しい関係が生まれてくるように願っている、ということを言っておられた。編集者として、いくつかの思いを述べたい。私たちは、富山における教育の原点として、明治の近代化以前の教育に着目し、江戸時代からのとりわけ寺子屋教育の役割を建築学的なアプローチで分析し、後世にその本質を如何に伝えていくかを考えております。これは、文化の振興という次元を超え、教育と文化の範疇のものであり、皆様方にこの種の観点の重要さを知っていただき、皆様方とともに教育と文化についてより良き方向を見出していこうと思っております。以下に、アピールポイントを列挙します。
(1)文化・教育・地域と建築
・混放洞という文化財の保全改修について、理念と情念を木造建築文化財にふさわしい形で皆様方に伝われば と思います。これは文化財認識の啓発というべきものです。
・寺子屋教育を教育の原点としてとらえ、文化と教育について、特に今日の教育のあり方について鋭く迫りたいです。
・まちづくりについても、文化と教育の観点から地域において花が開けば、と願っています。
(2)皆様方と専門家
・建築の知識について、ここまで知ってくださいという押し付けはまったくありません。ただ、専門家が皆様方のために当然のごとく勉強し頑張っている様を見ていただければ、と思っています。

（取材・編集：　富樫　豊：　丸谷　芳正）

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
学生シリーズ（福井）　テーマ：「女性と建築」

女性がまちの細部をつくる

高橋　楢
（福井工業大学大学院工学研究科博士後期課程３年　内村研究室）

約5年前から、福井県敦賀市の舟溜まり地区において景観計画づくりに携わってきた。ワークショップ等を重ねる中で、～住民の思いを読み取る方法や、その思いのヴィジョンを模索し提示していくこと～、敦賀のまちには実にいろんなことを教えていただいた。　敦賀の取り組みの内容と合わせて紹介させていただきたい。

舟溜まり地区は、旧敦賀港に面し、敦賀酒蔵や博物館などのすこしの歴史的建築物と普通の住宅地とが共存する相生地区と、今ではほとんどが無機質なビルとなっているが、“越前ガニ”ブランドの発祥の地でもある魚問屋等の建物が多く立地する蓬莱地区からなっている。

景観づくりは、調和のとれた外観をつくることではなく、まちのコミュニティを再生し自分たちの生活を自分たちでつくること、すなわち人の気持ちづくりの計画なのだといいつつも、この地区には例えば、漁業者と魚問屋との微妙な関係や、商いに重きを置くか静かな住環境を求めるか、住民の気持ちにも温度差がまざまざとあった。また、建替えを近年終えたばかりの家が多く、住民の関心や志気は高いとはいえなかった。何よりこれまで幾度も行われてきた各種計画委員会等を経て、なお変わらぬまちの有様に住民の不信と疲弊も大きかった。

そのため、はじまりは景観計画の構想づくりではなく、このような不満や対立関係、軋轢といった境界をいかに打破し、一人二人の気持ちに灯をつけるだけでなく、みんなの気持ちにどんな未来像を建ててゆくことができるのか、それが真髄だと感じた。

幾たびかのＷＳを通して、特に変わったのは女性の住民の方たちだった。

「花を飾っている今の活動も立派な景観づくりですよ」「まちづくりは隣人のことを考えることです」という言葉に即座に反応し、次は何をしたらいいのだろうということで、独自に写真や資料を持ち寄り、「ちょっと出てきてよ」と役所の方に自ら声をかけて話し合いの場をもうけるなど、次の行動も早かった。しまいには「まちづくりを考える女性の会」まで発足。まちはどんな風に歳をとってゆくんだろう。わたしはまさに、ここにまちの心音を聞いた気がする。

このとき持ち寄られた写真には、祭りの時には山車が通るという歴史文化ある地区の誇りや、当時の商店街としてのにぎわいへの追想、魚屋のオバアチャンの前掛けなどへの愛着が詰まっていた。通りには人がとどまる場所があり、みなが集まり話をする光景があり、景観づくりにこの写真を携えてきたこと、そこには女性ならではの生活と結びついた視点があった。

景観計画では、この日常的な感覚・記憶をイメージとして描き出し、前掛けなどのモチーフや一輪挿し等のすぐにでも取り組み可能な活動、蟹・魚の加工風景といった独自の風物景観としての作業場の内装などについても景観形成基準として、助成策に盛り込んだ。

地区の固有な景観というのは、時には日常生活の微妙な形にあらわれ

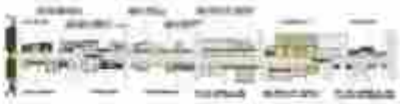

図1　相生地区の博物館通り

図2　舟溜まりから蓬莱地区を望む

図3　住民が持ち寄った一コマ

図4　自分の家の様にまちをイメージする

図5　舟溜まり地区の改修事例

る。まちが些細な日常やそこにずっと流れている時間とつながり結びつく時、何とも言えない魅力を発揮する。自分たちの生活をつくることが、そのままちをつくることにつながっていき、自分の家のようにまちの具体的な空間がイメージされることなのである。

現在、魚まちの２軒の改修を通して実際にまちの姿が変わってきたのをみて、この機会にまちに合わせて改修したいという案件が続いている。さらに、個人宅の庭やコレクション等の公開を住民同士で促したり、古い道具の残る床屋の活かしかたを考えたり、女性が中心となって日々の会話の中でどんどんイメージがふくらんでおり、継続的なエネルギーとなっている。

生活そのもの、日常そのものを表出する景観は、建築・都市計画の分野からこんな家政学の分野にスライドしていくのではないだろうか。その根幹を担い、まちの細部をつくるのは、女性たちが中心であると感じる。

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
学生シリーズ（石川）　テーマ：「女性と建築」

優しい色合いで描く作品への思い

山越　あゆみ
（金沢工業大学大学院工学研究科建築学専攻２年 森俊偉研究室）

出産。それは女性にしかできないこと。体内において一度に２つの命を宿し、生命の息吹を直に感じられる十月十日。人間だけに留まらず、同様に、植物や動物へも愛情を注ぎ、建築にも命を宿す。そう、建築はわが子そのもの。

妊婦の顔は美しい。これから出逢うわが子へのあふれんばかりの愛に満ちた優しい顔と、これからわが子を産み育てるという覚悟を決めたたくましい顔が共存している。これ以上美しい顔・姿はないとさえ思える程である。

感情。私は大変自然環境に敏感である。富山の田舎で育ち、母親に様々な花の名前、物事の美しさを教えてもらったからであろうか。雪解けの頃合いになれば、風の便りで春に気づき、今の季節はやはり稲穂の香りが香ばしい。夕暮れ時、絵の具をこぼしたように燃える空を横目に、身体中で四季を感じて帰宅する。

当然のことながら、私はまだ出産を経験していないが、潜在的能力、母性本能とでも言おうか、女性には特別なものが宿っていると思う。そして、これらの行為が私のプレゼンテーションには活かされているように思う。文芸春秋のプレスの方には、「生活の基本、生命の開花する場への豊かな発想があると思う。」と評価を頂いたことがある。私はプレゼンテーションを行う際、優しい色合いに気を遣う。まるでひとつの絵画をみるような、見た瞬間に人々を惹き付け、幸福感を与え、気持ちを穏やかにするような作品にしたいと思っている。

また、香りさえも感じられるようなものがいい。木々の香り、本の香り、油絵の香り、キッチンからの夕食の香りが漂ってくるような表現を感じ取ってもらえるようなプレゼンテーションを心掛けている。

Fig1は住宅平面である。淡く優しく着色することで、自らの幼少時代を回想するような印象、または未だ見ぬ家へのあこがれを創造させるような印象を与えるであろう。Fig2は住宅の一部分を立面的に描いたものである。生活感が漂ってきそうな予感を与え、見る人の想像力をかき立てる。Fig3は同窓会館のパースである。私はいつもこのようなテーストで着色をしている。Fig4は建築の学生の学び舎である建築スタジオ館の鳥瞰パースである。大胆さと繊細さの両面を兼ね備えているところが女性らしさだと考える。妊婦の表情のように。.

図1　木造の家

図2　書斎とキッチン

図3　同窓会館

図4　建築スタジオ館

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!37号
学生シリーズ（新潟）　テーマ：「女性と建築」

空間をつくること

錦　舞子
（新潟大学大学院自然科学研究科環境科学専攻1年　黒野研究室）

『女性と建築』を考えるにあたって、今年行った活動を踏まえて考えていきたいと思います。

修士1年の授業「建築計画特論」(2単位)で三条ポケットパーク事業というものが毎年あり、今年で4年目を迎えました。これは三条市と新潟大学自然科学研究科が協働するまちづくり活動です。三条市の中心市街地を東西方向に横断するJR弥彦線の高架下には、11か所の小さな空き地があり、そのうち8か所に三条の8つの里山の緑を毎年1つずつ移植します。高架下の緑道に気持ちのよい空間、三条の里山の自然を感じられる空間を、地域住民、専門家、行政、私たち学生が協働してつくります。住民と学生が4班に分かれ、それぞれが設計を行い、三条市民による投票が行われます。

班では、実際に高架下の緑道を通って敷地を見たり、園芸組合の方たちと一緒に里山を歩いて里山を感じながらどのような植物があるのか確かめました。実際に体を動かしたり、話し合いを繰り返しながら自分たちの中でどのようなポケットパークがあったらよいかイメージを膨らませていきます。私の班は住民に1人、学生で私1人と、班員8、9人ほどのうち女性が2人でした。他の班でも男性の方が圧倒的に多く、休日の昼に集まりがあるにも関わらず思いのほか女性の方が少なく、全体でもポケットパーク事業参加者のうち女性は、1割に満たないほどでした。

しかし、班活動を通して感じたことは、植物に関する知識やこの場所をこうしたい、この植物を植えたい、こうすると楽しい・気持ちよい、といった考えや設計に関する希望を持っているということは男女で変わりません。皆、大人という立場からのみでなく、誰もが経験したことのある子供の目線に立ってポケットパークがどのようであれば楽しいか、安心して過ごせるか、ということを大事にして考えていきました。

ここでは修士になって行った設計活動であるポケットパーク事業を例として述べましたが、人口の半分は女性、すなわち単純に考えれば空間を利用する半分は女性になります。また、世代も様々で、ポケットパークならば高齢者、学生や子供、主婦の利用が多いと思われます。このことからも空間の在り方、デザインを考えるのが女性であることは自然なことであり、理想的な形としては今回のポケットパーク事業のように老若男女皆がどのような空間が過ごしやすいか利用者の一人として考えていくことであると思います。

今回の事業を通して、誰にとってもよい建築とは、ある特定の世代・性別の人たちが考えてできるものではない、つまり、男性・女性関係なく、さまざまな人の意見・希望があればある程それだけよい建築に近づくことができるのではないかと改めて感じました。テーマに『女性と建築』とありますが、「女性と建築」という括りに皆が違和感を感じるような社会となれば、

図1　まち歩き

図2　里山歩き

図3　敷地写真

図4　話し合いの様子

図5　最終発表時の模型写真

より住みやすい環境になり、これからの建築を支えていくのではないかと思います。

2010年度 日本建築学会大会（北陸）報告

丸谷　芳正　（富山大学芸術文化学部教授，2010年度日本建築学会大会（北陸）事業委員長）

2010年度日本建築学会大会（北陸）は富山県でははじめての開催で、富山大学で行われた。発表題数、参加人数ともこれまでの最大数となった。心配された台風も進路を急に変えるなど、天候にも恵まれ成功裏に終わった。AH！では37号、38号にて2010年度日本建築学会大会(北陸)の報告を特集する。

2010年度日本建築学会大会(北陸)概要報告

1. メインテーマ　「つなぐ－継承と創生－」

2. 期間　2010年9月9日(木)～9月11日(土)

3. 会場　富山大学・五福キャンパス(大会メイン会場)：富山市五福3190
富山県民会館(記念講演会)：富山市新総曲輪4-18

4. 発表題数

学術講演発表題数	6,616題
建築デザイン発表題数	172題
総計	6,788題

5. 大会参加者

有料登録者	9,252名（会員8,625、会員外627）
無料登録者	428名
合計参加者数	9,680名

6. 懇親会

9月9日(木)富山電気ビルディング5階大ホール　参加人数：340名

7. 記念行事

①記念シンポジウム：歴史・地域・ひとをつなぐ
「つなぐ－継承と創生－」富山から考える日本の木造建築文化
9月11日(土)　会場：富山大学黒田講堂　参加者数：133名
②記念講演会：市民をつなぐ
「歴史、人、風景をつなぐ～映画作りの視点から～」
9月8日(水)　会場：富山県民会館304号室　参加者数：110名
③トークラリー：夢をつなぐ
「建築、夢と愛とロマン」
9月10日(金)　会場：富山大学五福キャンパス工学部210講義室　参加者数：92名
④語り合いのシンポジオン：学生をつなぐ
「地域への想いをかたちに」
9月10日(金)　会場:富山大学五福キャンパス工学部210講義室　参加者数：66名
⑤学生と地域との連携によるシャレットワークショップ：学生と地域をつなぐ
「越前大野のまちづくりデザインを考える」
ワークショップ：9月1日(水)～5日(日)　会場:越前大野市(福井県)　参加者数：53名

⑥作品展示：

9月9日(木)～11日(土)　会場：富山大学五福キャンパス第1体育館

⑦講評会：

9月10日(金)　会場：富山大学五福キャンパス理学部多目的ホール　　参加者数：54名

⑧見学会：歴史をつなぐ

「富山県の近世・近代建築探訪バスツアー」

9月12日(日)　　参加者数：32名

8. 関連行事

①夜なべ談義＋見学会：伝統をつなぐ

A.まちづくり夜なべ談義

9月11日(土)　会場：高岡市吉久の町家　　参加者数：63名

B.勝興寺修理現場見学会(平成の大修復)

9月12日(日)　会場：高岡市伏木(勝興寺)　　参加者数：27名

C.職藝学院見学会など(伝統技能と心の継承)

9月12日(日)　会場：富山市東黒牧(職藝学院)　　参加者数：95名

②討議の集い：深耕をつなぐ

「夢と希望」

9月10日(金)　会場：富山大学五福キャンパス生協食堂　　参加者数：18名

③「アーキニアリング・デザイン」パネル展：建築デザインとテクノロジーをつなぐ

9月9日(木)～11日(土)　会場：富山大学五福キャンパス第1体育館

④建築紛争フォーラム：建築と法曹界と市民をつなぐ

「戸建住宅を巡る建築紛争」

9月11日(土)　会場：富山県民会館304号室　　参加者数：92名

⑤建築学会住まいづくり市民セミナー：住まい手と作り手をつなぐ

「楽しく、やりがいのある住まいづくり」

9月12日(日)　会場：富山明治安田生命ホール　　参加者数：88名

日本建築学会北陸支部広報誌　AH137号

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

市民をつなぐ：「映画作りの視点から　～歴史・人・風景をつなぐ～」

下川　雄一　（金沢工業大学環境・建築学部准教授）

去る2010年9月8日に建築学会大会（北陸）の記念講演会として、映画「剱岳　点の記」で知られる木村大作監督の講演会、および建築評論家である五十嵐太郎氏（東北大学教授）との対談が富山県民会館で開催された。参加者は110名で、大半が一般市民であった。

会は水野一郎氏（金沢工業大学教授）の主旨説明から始まり、今大会のメインテーマ"つなぐ－継承と創生－"、そして記念講演会のテーマ"市民をつなぐ"について説明され、建築学会と富山の人達との対話の場にしたい、と来場者へ語りかけられた。続いて、この記念講演会が今大会の最初の行事であることから、佐藤滋会長からの挨拶もあり、「剱岳」を見られた感想や建築学会の概要等についてお話された。その後、基調講演に先立って「活動屋・木村大作　最期の闘い」(27分）という「剱岳」のメイキング映像が上映され、来場者全員が「剱岳」の世界に一気に引き込まれることとなった。

上映後、木村監督の基調講演（１時間）が実施された。内容は「剱岳」に関連したものであったが、様々なエピソードを含めたユーモア溢れる内容であった。下記にその一部を紹介する。

音楽の話：　外見に似つかわしくなく（本人談）クラシック音楽が好きな事、ビバルディの四季など自身が選曲されたクラシック音楽でBGMが構成されている事、それについて日本山岳会のメンバーでもある星太子とお話された話題などが紹介された。

徒労という考え方：　「剱岳」は日本地図完成に必要な測量をするためだけに、1年間に200日もの間、立山連峰を黙々と歩き続ける測量隊の話である。そういう地道な努力を重ね、ひたすら何かに打ち込んでいく姿勢が大切。「剱岳」の撮影隊もまさに同じ姿勢で映画を作り上げ、良い評価を頂けたことを考えると、"徒労"ということが現代ではすごく大切な事だと思うようになってきたとのこと。

非常識であること：　黒澤明監督のもとでのカメラマン時代に経験したエピソードも幾つか紹介された。非常識な言動を繰り返してきたと自身の人生を振り返りつつも、非常識でなければ成せない事もある。「剱岳」の映画作りも過酷で、ある意味非常識だったが、だからこそあの映画が出来た、と熱く語られた。

場所や風景について：　「剱岳」の宣伝で47都道府県を回ったが、どの県も建物の特徴や様式の違いが薄く、近代化の悪い面を如実に感じたとのこと。一方で、地域によって"瓦"に特徴があること、沖縄が最も個性を感じること、建物や町並みがもう少し自然や場所と調和していれば映画作りも苦労しないこと等を冗談交じりに話された。

後半の対談では、まず司会の水野一郎氏から「厳しさの中にしか美しさは存在しない」という監督の言葉がやはり印象的です、とのコメントがあり、約１時間の対談が展開された。以下にその一部を紹介する。

（五十嵐）「剱岳」の原作との関わりは？
（監督）「八甲田山」の撮影後に一度読んだが忘れていた。能登半島への撮影旅行の途中でたまたま立山に寄って、そこで原作を読んだ事が直接のきっかけ。その前には男鹿半島や竜飛などにも撮影旅行に行った。自然の厳しい姿、美しい姿を映像化したいと思っていた。
（五十嵐）鳥取県に三仏寺投入堂というのがあり、その風景も非常に貴重だが、そこへ辿りつく過程が大変で、野生に返るような感覚があるが…
（監督）撮影過程もよく似ていて、測量隊とほぼ同じ経路を歩いた順撮りであった事が、役

写真1　水野一郎氏による主旨説明

写真2　佐藤滋会長の挨拶

写真3　木村大作監督の基調講演

写真4　木村監督と五十嵐氏の対談風景

写真5　会場前での「星景写真展」風景

者さん達を無の境地に追い込み、自然な演技ができていたのではないか。その意味で当時の情景がよく再現できたと思っている。
（五十嵐）監督が撮り貯められた映像集「春夏秋冬フィルムライブラリー」の中で例外的に東大寺や法起寺などの人工物の映像が含まれていたが…
（監督）これまでに造形物や自然を見て感動して泣いた事が３度ある。南極のパラダイス・ベイ、ペルーのマチュピチュ、そして剱岳。剱岳のそれは、下見で別山におり、雨上がりに霧が晴れたその瞬間から、目の前に神々しい剱岳が突然現れた時のことだった。僕の場合、何かに感動するということが映画作りの原点かもしれない。
（五十嵐）木村監督はカメラマンの中でもピント合わせが特に上手かったとお聞きしているが…
（監督）若い頃、焦点距離と視野角の関係を頭の中に叩き込むために、街に出かけて、風景の切り取られ方を分度器で確認するという訓練をしていた。現場でかっこ良く仕事をしたいというのもあったが、実はそういう影の努力もかなりやっていた。
（五十嵐）建築も空間の大きさを体で覚える事が重要ですが、共通する面がありますね。

また、五十嵐氏は監督の撮影による映画「誘拐」(1997年）を例に挙げ、都市空間を背景とした映画作りの話題にも触れた。東京の銀座や歌舞伎町など大都市がすごくダイナミックに映像化されているとのコメントに対し、監督は舞台裏のエピソードを含め、自然を舞台にした剱岳とはまた全く対照的な映画作りのドラマがあった事を紹介された。さらに、会場からの質疑では，映像制作の実務経験者からの質問があったり，別の来場者から次回作を期待する声が挙がったりした。

閉会の言葉として、水野一郎氏は「前半の基調講演ではざっくばらんな雰囲気の中にも一つ一つ大切で重い言葉があった。また会全体を通して、木村監督の映画作りの原点、エネルギー、姿勢などを強く感じ、示唆に富んだ会であった」と述べられた。

今回、会場前のロビーでは、アマチュア写真家の中川達夫氏のご厚意により、剱岳を被写体とした「星景写真展」も併催された。参加者が会の前後や休憩中に，剱岳とともに写し出された美しい星空に見入る姿が印象的であった。

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

トークラリー：夢をつなぐ

「建築、夢と愛とロマン」

永野　伸一郎（金沢工業大学環境・建築学部建築系教授）

2010年度のトークラリーは、「建築、夢と愛とロマン」をテーマとして、芦原太郎先生（芦原太郎設計事務所代表、日本建築家協会会長）、工藤和美先生（シーラカンスK＆H代表）、若山滋先生（中京大学客員教授）の3名の建築家に、建築作品を語る上で欠かせない、建築についての夢と希望を語っていただいた。少し気恥ずかしいような標題テーマではありますが、富樫豊先生（富山建築・デザイン専門学校）の強い導きと大会事業部委員会内での「ロマン・浪漫」についての論議を経て、建築を目指そうとする学生に建築家がストレートに語っていただけるキーワードとして、採用した背景があります。できれば幼少より建築とどのように向き合ってきたかを、少しでも垣間見える語りをしていただければ、学生も、我々も建築家の作品を理解する手助けになるだろう、そのような期待を込めました。さらに少し格調高い？個別テーマをお願いし、どのように料理していただけるかを楽しみに待つことにしました。

トップの芦原先生は、「芸術と建築」の題目で、幼少に過ごした住宅、小学校時代のヘルメットを被り故芦原義信先生（お父上）と現場の見回り、東京芸大生時代などの大変貴重で興味深い写真を紹介されました。住宅の設計においては「一本の線が家族をつくる」という自負が必要であることを強調されました。地中海の「建築家なしの建築」に感銘を受けて、半年間を過ごされたことを語っていただきました。また、今もなお新しい環境に対して自分が何に反応しているのかを楽しむ気持ちで建築を設計している話されたことが印象的でした。

工藤先生は、「美学と建築」の題目で、生まれてから今までで23回の引っ越しをしてきたことが、その土地、町、建築に対して敏感になっていくきっかけになったというエピソードを語られました。住宅は1ケタの人の集まり、テーブルを囲むという感覚であり、それに対して40,50,100の「人の集まり方」に関心があり、建築作品の写真を示しながら話されました。「境界」は分離かつなぐかのどちらなのか、人と人をつなぐ機会として捕えることを考えてきたことや、自身の大学時代の通学路で目にした美しい田圃の穂積など、日常の中での美しい光景に眼をつけることができるかどうか、そのような感性が必要なことを強調された。学校作品では「きれいは元気」であり、きれいな絵があればこころは変わるので絵を掲げるようにしているという信条があるとも。また、苦手なことにチャレンジするということで、苦手だった水泳が得意になった経験があり、建築もそのような面があるので、チャレンジしてくださいとエールを送っていただいた。

若山先生は、「文学と建築」の題目で文学作品、源氏物語と漱石作品を中心にこれまでの研究の一端を紹介された。また、ご自身の母方の親戚に、書家の篠田桃紅氏いらっしゃることを紹介された。建築の意味を解くためにアンケート調査、科学的なことをやってみたが、解き明かすのが難しいと考えるに至り、文学の面から建築を解き明かす研究に着手し、これまで27年間やってきたことを話された。「源氏物語」を建築的に読み解いていくと、外から室内に向かって池、前栽、庇、御戸、すだれ、几帳などを乗り越えてゆく描写があり、これらは柔らかなへだて、「多重のへだて」であることを紹介された。さらに、漱石作品の中から、草枕、三四郎を取り上げて、建築との関わりを話された。いずれも多彩な建築家の個性を垣間見ることができたトークラリーでした。

写真１　芦原太郎先生講演

写真２　工藤和美先生講演

写真２　若山滋先生講演

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

見学会：歴史をつなぐ

「富山県の近世・近代建築探訪バスツアー」

松政　貴治（富山大学芸術文化学部教授）

9月12日（日）の、「歴史つなぐ」見学会は、当初は「富山の近代化遺産探訪バスツアー」という標題で、共に分離派建築会の中心メンバーの設計による黒部川第二発電所（山口文象）と高岡本丸会館本館（矢田茂）を中心に、富山県に残されている明治・大正・昭和の近代化遺産を巡る計画であった。しかし、発電所の見学が急に困難となったため、県西部を中心にした「富山県の近世-近代建築探訪バスツアー」に変更した。

富山駅前を朝7時半に出発し、
　世界遺産・五箇山合掌集落（重文・岩瀬家・村上家、菅沼地区、相倉地区）
　　～福野高校重文・厳浄閣（旧富山県立農学校）
　　～昼食
　　～高岡市清水町旧配水塔
　　～国宝・瑞龍寺
　　～高岡本丸会館
　　～重伝建・高岡山町筋（富山銀行、重文・菅野家）
と訪問し、高岡駅を経て17時に富山駅前で解散する一日となった。

松政が下見を重ねて企画し、見学先の予約と配付資料の作成を担当し、富山県庁の高畑訓氏が当初から全体をまとめ、当日は松政が解説役、高畑氏が幹事及び会計として同行した。参加申込み者は当日まで入れ替わりして最終的には我々を加えて34名となった。参加費は交通費・入館料・資料代・昼食代を含めて5000円を当日に徴収した。早朝の高岡市付近は大雨であったが、富山駅を出発する頃には雨は上がり、高速を通って9時前に南砺市の五箇山に着く頃には晴れ間も見え、幸いその後の天候は回復した。

五箇山の見応えのある岩瀬家（江戸後期）・村上家（約400 年前）では十分に時間を取ったこともあり、それぞれの説明に多くの質問があった。下見済みの展望場所にも上り、相倉集落全体の眺望も参加者には魅力的だったと思われる。城端地区に下りる道沿いの展望台に立ち寄り、散居村の眺望を紹介した。

福野高校・厳浄閣（旧富山県立農学校、1903 明治36 年、設計：藤井助之丞）では、明治時代の大工による匠の技と、移築までして保存に努めた地元の熱意に参加者は感心していた。

昼食後に砺波市を経て高岡市の清水町旧配水塔（1931 昭和6 年、設計者不詳）に向かった。市の水道局の方が二人、待って頂いていて、通常は見られない配水塔の上部まで上ることができた。私も初めてこの鉄骨造部分を見学できたことに大変満足した。ドイツ表現主義のペルツィヒの給水塔のデザインに影響されたと思われるRC造の上部に、高岡固有の銅板葺きの水槽部分を冠した特徴的な意匠にみなさんも驚いておられた様子である。

続いて、加賀藩前田家建立の瑞龍寺・仏殿（1659）・法堂（1655）・山門（1820）を訪問した。事前にお願いしていた通り、副住職に直々に案内して頂き、見事な解説の最後には大きな拍手が起こった。私は、この瑞龍寺の配置について、高岡の築城や霊峰二上山との位置関係に関して風水による占地が行われただけではなく、立山連峰の眺望も考慮されているはずであると思っていたが、そのこともこの見学で論証された。

写真1　五箇山・岩瀬家

写真2　清水町・旧配水塔

写真3　瑞龍寺

写真4　本丸会館本館

次に、老朽化を理由に高岡市が取り壊しを表明している高岡本丸会館本館（1934 昭和9年、設計：矢田茂、清水組）を訪問した。市の管財用地課の二名の方が待って頂いていた。全体の構成だけでなく、ペレを思わせるような内部のRC造の梁の意匠や、木部インテリア、天井の漆喰の鏝絵などを解説すると、用途を工夫して保存活用できないものかという感想があちこちから聞こえてきた。

最後に重伝建地区の山町筋に向かった。富山銀行本店（旧高岡共立銀行本店1915 大正4年、設計：田辺淳吉・辰野金吾、清水組）では、銀行の幹部の方など数名が待って頂いていた。銀行のセキュリティを考えると、竣工当時の意匠を残すいくつかの部屋を案内して頂いたことに参加者一同、感謝しておられたようである。

高岡のかなりの部分を呑み込んだ明治33年の大火の直後に、土蔵造りで建てられた菅野家では、黒漆喰と煉瓦隔壁を特徴とする重厚な外観と最高級の素材を使った内部の造作が、今日まで使われながら受け継がれてきたことにみなさんも驚いていたようである。

タイトな一日ではあったが、万葉の時代に始まり中世を経て瑞龍寺や勝興寺などの近世に受け継がれてきた富山県の建築の歴史を、現代にもつながる近代の貴重な作品の魅力とともに、堪能して頂いたのではないかと思っている。

日本建築学会北陸支部広報誌　AH137号

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

伝統をつなぐ：夜なべ談義　　「点・てん」

加藤　剛子　（造形作家）

建築学会全国大会の最終日、富山県高岡市「吉久（よしひさ）」という古い町並みの、サマノコと呼ばれる格子の間から暖かい灯が漏れるその古い古い町屋に、ぎゅうぎゅうとたくさんの人が集った。残暑も猛暑の夜、ビールで喉を潤しお隣のカフェからのケータリングの夕食を味わいながら「まちづくり夜なべ談義」がワイワイと開催された。

吉久は江戸時代から続く加賀藩の御蔵町として栄えていて、千本格子の町屋が今も軒を連ねているところ。新築住宅もあり、町屋を改修したカフェや工房もあり。会場の町屋は江戸時代に建てられたもので、この夜なべ談義のコーディネーターである丸谷芳正さん（富山大学）が今後自宅と工房に改修されるとのこと。現在建築家の奥さまとご夫婦で計画を練っておられる。江戸時代の架構はとても美しく調べるほどに情重になるそう。私としては改修された姿を早く観たくて楽しみにしているけれど、まだ改修の手を着けておられない空間、江戸明治大正昭和の二ホイのするなかでの談義も現実味たっぷりで良いものだった。参加者も、見学しながら自分ならこう改修したいとか、ここはどう解決するのだろうなどと、きっと想像や妄想を楽しまれたのでは！？

談義は、まちづくりのいろんな面での経験者達が体験されたことをリレートークで細やかに熱く報告された。まずは県東部の滑川市の酒屋改修に取り組まれた例。廃業された酒蔵とお屋敷を改修し町のお祭りにも場を提供されている。その影響を受けて近隣の古い町屋も改修されはじめているとのこと。次は金沢の町屋と能登の漁村と輪島市の例。金沢では町屋の改修を手がけたり相談に乗ったりする法人や建築家や工務店がある。能登の漁村ではサーファーが波の魅力をツイッターやブログで紹介し他県からの若者が増えてきたとのこと。漁村とは違う意味での新しい魅力が掘り起こされつつある。能登沖地震で被災した輪島の塗師蔵を救おうと立ち上がった建築家と左官職人たちの技術と知恵、困難から生まれたアイディアによって新しい蔵も生まれている。日干しレンガを作って壁の内部に積みそれを意匠として見せているのが新鮮でおしゃれだった。

参加者からは、今はこの地を離れているけどいつも気にしているという若い建築家や、住み続ける住人は町への切実な想いと資金面についてや感想を正直に熱く語られたり、行政マンからもその場ですぐ住人の疑問に応えたりして双方のやりとりがある談義になった。予定時間をかなり越えてもまだ話し足りないしまだまだ聞きたい感でいっぱい、この丸谷家の改修の方針や計画ももっと聞きたかったけど、次回（？）のお楽しみに。丸谷先生のお人柄と幅広い人脈で、和気藹々と率直に話し合えた充実した時間だった。

観光客ねらいのまちづくりイベントは疲れるし続かない。みんなでがんばろうスタイルってどうなんだろう？ひとりひとりの当たり前の「日常」として、まずはひとりひとりが「楽しみたい」という、小さくてもきらりと輝く「点」のほうに魅力を感じる。手入れの行き届いた住まいと庭先だったり、小さなお店やカフェ、ギャラリーやアトリエだったり。どのまちにもそこにしかない場があって、魅力的な「点・てん」があって。それがいつの日かつながって「まちづくり」になる、というふうな。そういえば今回富山での大会記念講演は、映画「剣岳　点の記」の監督木村大作氏の講演から始まった。剣岳にある「点」もすばらしい魅力的な点！点と点でつながった暑い熱い夜となった。

写真1　夜なべ談義風景１

写真2　夜なべ談義風景２

写真3　夜なべ談義風景３

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

伝統をつなぐ：「職藝学院見学会など」

池田　勲成　（職藝学院副学院長）

９月１２日(日)、“つなぐ”＝「伝統技能と心の継承」をテーマに、『職藝学院見学会など』（２０１０年度日本建築学会大会[北陸]関連行事・北陸支部主催）が開催され、県外を含めた95名もの多くの参加者が、木造建築の意義とそれを支える職人教育の重要性について思いを共有した。

最初に、実習中心の実践教育を進めて１５年目を迎えた職藝学院の授業見学が内外６ヶ所の実習場で行われ、“大工：建築大工・家具大工・建具大工”による実物教材の木製パーゴラや造作基礎としての格天井づくり、椅子や座卓・戸棚などの実用家具と框系の建具づくり、そして“庭師：造園師・園藝師”による石組み・敷石・植栽・垣根などの基礎技能を盛り込んだモデル庭園づくりなどに熱心な眼差しが注がれた。

引き続き大研修室において、高口洋人早稲田大学准教授の司会のもと、３つの実践活動が「話題提供」として報告された。
①１８才から６５才まで学ぶ人生道場とも言える入学から卒業までの“職藝学院の四季”について（稲葉貴学校法人富山国際職藝学園理事長）
②リユース率９６％及びＬＣＣＯ2の在来工法木造住宅比３８％減を実証した自然素材による富山の木造伝統構法「完全リサイクル住宅（W-ＰＲＨ）」について（中島裕輔工学院大学準教授）と、生態学的なアプローチによる岐阜の「完全リサイクル住宅（C-ＰＲＨ）」の作庭事例について（渡邊美保子職藝学院教授）
③使い込まれた手づくり道具や東京・平和台の古民家再生などの事例による伝統技能とその心の継承について（阿部勤アルテック主宰）

話題提供を受けた「鼎談」では、内田祥哉東京大学名誉教授と尾島俊雄早稲田大学名誉教授に職藝学院渡邊美保子教授が加わり、三者それぞれの木造建築との関わり合いから話が始まり、大工仕事や職人教育まで話が膨らんで、最後に大工を目指す若者達への提言で締めくくられた。

大量の粗大ゴミとなったこれまでの建築づくり、日本の様式としての木造建築の確立、西欧では見られない家族変化に対応して増改築できる木造軸組工法の素晴らしい特質、環境や庭を建築づくりと一体的に学ぶ大切さ等々が話し合われた。そして、伝統の技をつなぐことの難しさはあるものの庶民生活の一部として染み込んでいる精緻な日本の大工仕事は決して途切れることはないであろう、そのために大工を目指す若い人達には是非良い木造建築を選んで見てほしいという提言がなされた。

なお、「Ｗ－ＰＲＨ実験住宅」・「伝統と心の継承・古民家再生」のリーフレット、および「完全リサイクル型住宅Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ」（早稲田大学出版部）・「ワポットの本７」（中央公論新社）の書籍4冊が当日資料として配布された。

写真1　実習見学

写真2　話題提供と鼎談講師

写真3　話題提供と鼎談講師

写真4　話題提供「ＰＲＨ」

写真5　鼎談

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

建築と法曹界と市民をつなぐ

建築紛争フォーラム「戸建て住宅を巡る建築紛争」

北岡　正弘　（専門学校職藝学院）

日本建築学会に司法支援建築会議が発足して10年目となります。社会環境や経済環境の変化に伴って建築関係紛争は、今後ますます増大することが予想されております。司法支援建築会議は日本建築学会が会長直属の会議体として設立するもので、建築関係訴訟に関して、学会が保持する厳正中立的な立場から裁判所に対する支援ならびに裁判所の協力のもとに裁判判例等の建築紛争情報の調査・分析を行いその成果の公表を通じて、学会会員への啓発と建築の学術・技術・芸術の進展に、さらに社会公共に寄与することを目的としています。

設立以来、年に１～２回のペースでフォーラムを開催してきました。昨年度から大会に合せて開催することにもなりました。「建築紛争フォーラム」を通じて、地方の司法支援会員はもとより一般市民に対しても建築紛争の実態とそれに対する建築界、法曹界の現状をお伝えし、建築訴訟の実態を理解していただく機会になることを目指しています。

今回のテーマは「戸建て住宅を巡る建築紛争」でした。北陸地方は全国的にも有数の戸建て住宅が多い地域です。消費者運動の高まりを受け、地方でも住宅紛争は増加の傾向にあります。建築紛争は非常に複雑で多岐にわたりますが、今回は、特に地方の戸建て住宅紛争の特徴を分析し、建築や法律の専門家が、それぞれの立場から意見交換し、「施主と設計者（設計料を巡る紛争）、施工業者（瑕疵・追加変更工事等を巡る紛争）」を主題としました。

以下のプログラムで開催されました。

１．開会挨拶：　小野徹郎　（日本建築学会司法支援建築会議運営委員長）
２．主旨説明：　柿崎正義
３．基調講演：　宮澤健二　（工学院大学教授）
　　演題　「戸建て住宅建築紛争の特徴と未然防止」
４．主題解説
　・住宅構造（能登沖地震の被害）‥‥後藤正美（金沢工業大学教授）
　・基礎・地盤に関する建築紛争‥‥‥上田邦成（植田建築設計事務所）
　・室内環境に関する建築紛争‥‥‥‥原　英高（建築科学研究所）
　・契約に関する建築紛争‥‥‥‥‥‥島谷武志（島谷法律事務所）
５．パネルディスカッション
　　コーディネーター：稲葉　實（三四五建築研究所）
　　パネラー：上記講演者5名
６．まとめ：有馬　巽

主旨説明、基調講演に引き続き、主題解説として豊富な事例報告がありました。また、パネルディスカッションでは会場の参加者も含め、活発な議論が展開されました。充実した内容のフォーラムとなり、参加された方々にとっては建築紛争を未然に防ぐ手だてを考える良い機会になったものと考えています。

設計者・技術者にとっては紛争を防止するために、施主に対する説明責任を果たすことを通じて業務の透明性を高めると同時に、紛争事例に学ぶ必要があります。また不幸にして紛争当事者なった場合にも、円滑・迅速な解決のための必要な法的知識を備えておく必要があります。今回のフォーラムでは、予想を大きく上回る参加者数となりました。研究者だけでなく、一般市民や実務者の参加が多く、この問題への関心の高さを感じました。

写真1　主催者挨拶（小野徹郎運営委員長）

写真2　会場の様子１

写真3　会場の様子２

写真4　パネルディスカッション

建築学会大会2010［北陸］　報告
メインテーマ：つなぐ－継承と創生－

深耕をつなぐ

討議の集い「夢と希望」

永野　伸一郎　（金沢工業大学環境・建築学部教授）
富樫　豊　（富山建築・デザイン専門学校）

討議の集い　テーマ：「夢と希望」
日時　：2010年9月10日(金)18:00～20:30
会場　：富山大学生協食堂

討議の集いは、実務・研究・教育の風通しの良いコミュニケーションを図ることを目的として、9年前、本会大会が金沢で開催されたときに大会関連行事としてスタートし、その後、大会開催に合わせて実施されてきております。3年前からは、若い方と大人の交流を積極的に行うことにして、学生シンポジオンの終了後に実施するようになり、文字通り、老若男女、交流の場となっております。

今回の集いは、「夢と希望」をテーマに、(午後に開催された) 語り合いのシンポジオンの延長戦として討議することにして、参加を広く呼びかけましたところ、若者は3大学から14人、建築人（大人）は4人の計18人が集まり、夢や希望について大いに語り合いました。

集まった建築人は4名と少ないものの、いずれも個性的な方々であったためか、議論は、「そもそも人間としてあるべきとは何か、大学は使命を果たしているのか、建築学会の役割とは何か、など」の根本的・根源的な問いかけからスタートしました。

まず夢と希望の議論に先立ち、「建築界の未来」をサブテーマに建築界を支える教育研究機関の役割として、経済的観点、社会との結びつき、について、自由に語り合いました。

次いで、本題の夢と希望については、自由かったつに、大人は若年のときの夢や希望を、若者は今抱いている夢や希望を、大いに語り合いました。問題は「若者よりも夢を見ない（見ようともしない）大人にある」とのことで、大人はもっと遊ぶことが必要ではないか、といった意見を含めて、議論は発散につく発散で大いに盛り上がりました。

シンポジオンについては、種々語りの際にも感想として、話し合われ、他の学校のみんなも頑張っていることがわかり、大いに楽しめましたとのことでした。

最後にまとめとして。いささか参加者が少なかったことは気にかかりますが、世代を超え、分野を越えて、夢と希望を大いに語り合い、大いに楽しむことができました。お集まりいただいた皆さんに感謝するとともに、この良いムードを今後もつないでいきたいと思っている次第です。

写真1　熱弁をふるう建築人達

写真2　資料に目を通す、後にサプライズ

写真3　白熱の議論